

ハイデガーと可能性としての「宗教現象学」

上田 圭委子

フッサールの創始した現象学は、宗教的体験の哲学的な探究に対しても、新たな可能性を開くものであったと考えられる。というのも、現象学的方法は、宗教的体験における超越的なものと人間との関わりを、超越的なものがそれ自体何であるかという探究に関してはエポケーし、超越的なものと関わる人間の意識の領域自体を探究の対象領域として捉え、記述することを可能化するものであったからである。1916年から2年間フッサールの助手であったエディット・シュタインの後年の神秘主義研究は、現象学的方法が、超越者へと関わる人間の魂の領域に対する研究のための力強い武器となることを示している。

エディット・シュタインに次いでフッサールの助手となったハイデガーもまた、1918・1919年の未完の講義草稿において、中世神秘主義を「体験(生)」そのものとして見て、これを現象学的に扱う可能性を探っていた。この試みは、より精錬された方法概念を伴って、1920年・21年冬学期講義「宗教現象学入門」および1921年夏学期講義「アウグスティヌスと新プラトン主義」において展開されることになる。このうち前者においては、パウロ書簡をもとに、原キリスト教的な生の経験が現象学的に解釈されている。そこでは、世にあって、神から呼びかけられ、神の方へと向かいつつ、いつか必ず来るが、それがいつであるのかわからない主の再臨という世の終わりのときを待ちつつ、不安の中で生きる時間性の経験があらわにされる。また後者においては、回心を機に神を「真の喜び」として経験するアウグスティヌスが、その一方で常に肉欲、好奇心、名誉欲といったこの世の誘惑に陥る可能性にも曝されているという「告白」の解釈を通して、生の不安なあり方が「気遣い」の諸相として現象学的に露わにされる。

こうして取り出された事実的な生の形式は、主著『存在と時間』においては、世界の諸意義連関へと頹落した世人自己としての非本来的なあり方と、死へと先駆しつつ良心の呼び声を聴こうと決意し、本来的なあり方へと立ち返ることとのあいだを絶えず振動しつつ生きる現存在の実存の形式として、一見、脱宗教化された形で継承されてゆくように見える。しかしながら、ことはそう単純ではない。その後のハイデガーは、『哲学への寄与』において奥深い存在の呼び求める促しへの聴従帰属による「最後の神」の通りすがりの準備を企図していた。また『ヒューマニズム書簡』では、ヘラクレイトスの断片 ἦθος ἀνθρώπου δαίμων を「人間は人間である限り神の近くに住む」と敷衍していた。ハイデガーにおいては、むしろあらゆる人間が、現象学的に見るならば、その実存の構造においてすでに「宗教的」な本質をもつ存在者であることが、一貫して見て取られていたとも言えるのではないか。

実際、ハイデガーにおいては、自らを秘め隠しつつ顕現する「存在」、存在の非秘匿性としての「存在の真理」、存在がそれに対して露わとなるところの「現存在」という三つのものの関係と、それぞれの振動、すなわち秘匿と顕現、真理と非真理、本来性と非本来性のある

いだの振動が、さまざまな表現でもって、繰返し語られているのだが、こうした関係自体が、宗教的な事実に生の実験の核心である、この世の生における超越者と魂とのあいだ関わりの形式的告知として理解可能なものと言えるのである。

かつてレーヴィットは、「ハイデガーによってその都度にいわれたすべてのことの背後にあるもの、そして多くの人に耳をそばだてさせ、聞き入らせるものは、語られざるもの、すなわち宗教的な動機である」とし、この動機は「もはや信心深いキリスト教徒ではないが、宗教的ではありたいと思っている人々にかえって強く訴える」と指摘した。ここで「宗教的でありたい」人々とは、もはや自分が特定の宗教の教義を誠実に言葉通りに信じることはできないことを自覚しつつ、それでも自らの非力さと非性を率直に見つめており、自らを超えたものの呼び求める促しの声を、日常のさまざまな状況や出来事を通して、その実存において聴き取っている人々、あるいは聴き取ろうとしている人々のことであると解することができよう。ハイデガーを20世紀最大の思想家の一人へと押し上げた原因の少なくとも幾分かは、現代という時代に生きる多くの人々のうちで潜在しているこうした困窮、すなわち本来、「存在へと身を開きそこへと出で立つあり方」としての超越の運動をその本質として持つ存在者でありながら、その超越の本来向かうべき先の見えない状況に置かれていることの困窮それ自体ではなかったろうか。ハイデガーは、こうした困窮の時代においてなお実存の本質に潜む宗教性を露わにする可能性を、現象学のうちに見ていたのではないか。